

平成 31年 3月 18日

浜田市議会議長 川神 裕司 様

議員名 村武 まゆみ



## 調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1. 期 間 平成31年1月30日(水)～2月1日(金)
2. 調査研修内容  
全国公民館セミナー  
新しい公民館をさぐる ～人が集まるこれからの公民館のつくりかた～
3. 研 修 先  
東京都渋谷区代々木神園町3-1  
国立オリンピック記念青少年総合センター
4. 調査経費 24,166円  
交通費 23,196円(航空券 出雲⇄羽田)  
970円(タクシー 代々木→国立オリンピックセンター)  
  
(宿泊費は不要)
5. 調査研究活動の概要 別紙のとおり

### 【研修の概要】

#### (1) トークセッション

##### ① テーマ「もっと人が集まる公民館を！」

牧野篤(東京大学教授)×出野紀子(コミュニティデザイナー)

出野氏は私設の公民館 Co-Minkan を運営。公設公民館では堅苦しく、もっと気軽に社会教育ができる場を作りたかった。

集って、話して、また集う。

高齢者が集まるようになり、自分たちで知恵を絞り、手作りで空き家を改修。

そこに子供達も集まってきている。家に帰っても誰もいないさみしさを地域の高齢者と共に過ごしている。まずはやってみるが原則。今後は公設公民館と連携して活動をしていきたい。



## ②テーマ「公民館の可能性とグローバル化」

牧野篤（東京大学教授×南信之介（那覇市繁多川公民館館長）

公民館にエジプト人が来館し、エジプトに公民館を作りたい話を聞き、エジプトに公民館を！」を合言葉に活動を開始。「アラブの春後のエジプトの暮らしの価値をつくる、高めるため」が目的。その活動をとおして、今の日本の公民館は自信をもって紹介できるか？日本の敗戦後に公民館を拠点に日本の再建をした公民館を今一度振返ってみたい。

## ③テーマ「これからの公民館のありかた」

牧野篤（東京大学教授×中野理美（文部科学省地域学習推進課長）

「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」

《今後の地域における社会教育の在り方》

### 【1】多様化し複雑化する課題と社会の変化への対応の要請

#### 1、知己における社会教育の意義と果たすべき役割

- ・人口減少、高齢化、グローバル化、貧困、つながりの希薄化、社会的孤立、地方財政の悪化、SDGsに向けた取組等

⇒持続可能な社会づくりを進めるために、住民自らが担い手として地域運営に主体的にかかわっていくことが重要

- ・人生100年時代の到来、Society5.0実現の提唱

Society5.0とは：狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、新たな社会を目指すもので、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたしすてむにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会。

⇒誰もが生涯にわたり必要な学習を行い、その成果を活かすことのできる生涯学習社会の実現へ向けた取り組みが必要

- ・「社会教育」を基盤とした、人づくり・つながりづくり・ちいきづくり社会教育：個人の成長と地域社会の発展の双方に重要な意義と役割学びと活動の好循環

○人づくり：自主的・自発的な学びによる知的欲求の充足、自己実現・成長

○つながりづくり：住民の相互学習を通じ、つながり意識や住民同士の絆の強化

○地域づくり：地域に対する愛着や帰属意識、地域の将来像を考え取組む意欲の喚起。  
住民の主体的参画による地域課題解決

- ・新たな社会教育の方向性

～開かれ、つながる社会教育の実現～

○住民の主体的な参加のためのきっかけづくり

社会的に孤立しがちな人々も含め、より多くの住民の主体的な参加を得られるような方策を工夫し強化

○ネットワーク型行政の実質化

社会教育行政担当部局で完結させず、首長、NPO、大学、企業等と幅広く連携・協働

○地域の学びと活動を活性化する人材の活躍

学びや活動と参加者をつなぎ、地域の学びと活動を活性化する多様な人材の活躍を後押し

### 【2】「社会教育」を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくりに向けた具体的な方策

- ・学びへの参加のきっかけづくりの推進

楽しさをベースとした学びや地域防災、健康長寿、関心の高い学び等、学びや活動のきっかけづくりを工夫。

- ・多様な主体と連携・協働の推進

首長部局との連携を効果的に図るため、総合教育会議の活用や部局間の人事交流を推進。

地域学校協働活動を核にした社会教育と学校教育の連携協働

- ・多様な人材の幅広い活躍の推進  
地域の課題解決等に熱意を持って取り組む多様な人材を社会教育の活動に巻き込み、連携。教育委員会における社会教育主事の確実な配置と多様な主体による「社会教育士」の取得推奨
- ・社会教育の基盤整備と多様な資金調達手法の活用等

## 《2》今後の社会教施設の在り方

### 【1】今後の社会教育施設に求められる役割（公民館）

#### ○公民館の現状

- ・減少傾向にある館数
- ・主催事業減少
- ・利用者の固定化

#### ○求められる、期待される役割

- ・学習の成果を地域課題解決のための実際の活動につなげていくため
- ・地域の防災拠点
- ・「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校との連携
- ・地域学校協働活動の拠点
- ・中山間地域における「小さな拠点」の中核となる施設
- ・「地域運営組織」の活動基盤
- ・外国人が地域に参画していくための学びの場

- これまで公民館が培ってきた地域との関係を生かしながら、地域の実態に応じた学習と活動を結び付け、地域づくりにつなげる新しい地域の拠点設を目指していく事が望まれる。

### 【2】今後の社会教育施設の所管の在り方

H30年12月25日閣議決定

公立社会教育施設については、社会教育の適切な実施の確保に関する一定の担保措置を講じた上で、地方公共団体の判断で条例により地方公共団体の長が所管することを可能とする。

## (2) 集中講義「公民館を地域づくりの基盤に」

牧野篤（東京大学教授）

### ●教育と一般行政のはざま

#### ○社会教育はどうなるのか？

少子高齢人口減少社会「悲観論」

↓

人生100年社会へ「希望論」

ライフステージの在り方を考える

地域学校協働活動⇒学校の中だけでは完結しない＝学校と地域と車の両輪

アクティブラーニング…主体的で対話的な深い学び＝教育資質向上

従来の学校では成り立たなくなっている

⇒コミュニティスクール

学校…生徒の福祉的なことを抱えすぎている⇒教師の多忙感

⇒福祉職（ソーシャルワーカー）、部活指導員、雑務

現代では家庭に期待ができない⇒地域で

貧困家庭の増加、子どもの読解力の低下⇒「次世代をどう生きていくか」

#### ○総合教育政策局の新設…総合的な教育改革を推進するための機能強化

20年後 AIはホワイトカラーの仕事を奪う

今ない仕事につく⇒親が言うようには生きていけない⇒自分で生きる力

社会体験を重ね⇒新しいものを作り上げる、人の言葉を聞く力、コミュニケーション力をつける

#### ○社会教育を基盤とした、人づくり、つながりづくり、地域づくり

## なぜ社会教育でなければならないのか？

戦後公民館ができた時代…公民館は教育機関であり、生活実現の拠点

「次世代を育成していく場所」村のお茶の間

相互承認・自己肯定

社会教育…社会の底をつくる

一般行政に教育的なものを浸透させる

一般行政に社会教育・生涯学習を浸透させる

⇒人々が共生する新しい社会へ、社会の持続可能性を高める＝SDGs

## ●悲観論と希望論のはざま：いい社会なのに活かさない

○少子高齢人口減少社会は問題なのか？

・「高齢化」の認識

★誰もが健康で長生きすることを望めば、社会は必然的に高齢化する

⇒高齢化は対策すべき課題ではない！

・取り組むべき課題

人生 100年時代⇒与えられた時間を如何に楽しく、健康に生きるか。

二周目の人生における「幸せの形」を見るけること。

「超高齢社会」

⇒「健康長寿社会」

リタイア後の「余生」を送る ⇒自律した生活を送る（尊厳ある生き方）

・少子高齢人口減少社会から人生100年社会へ

高齢者への対応から子どもたちを主役に持続可能な社会をつくる

## ●自立と孤立のはざま：何が問題なのか？

○工業社会＝産業社会

人を人口として扱う社会

人を道具・手段とする社会

人の欲望は所有欲求によって満たされる＝故郷を捨てる学力

→成績の良い子は都会（大企業）へ行く＝人を入れ替え可能にする学力

○脱工業社会＝知識社会

人をその人として扱う社会

人を目的とする社会

人の欲望は存在欲求によって満たされる＝ふるさとを作り支える学力

→自立と承認と自治の学力→ひとを固有性としてみなす学力

○消費社会の落とし穴

・「自己責任論」の罠…自分で何とかしないいけない

・「やりたいこと」の呪縛…やりたいことをやりすぎてやりたいことが出てこない

・「個性化」の誘惑…失敗は許されないと思っている

・SNSの呪い…リセットできない→目立たないように生きる

⇒地道に頑張ることに意味がない

人が自分のことをどう思っているのかではなく、相手が喜ぶかどうか

自分が出来上がっていないのに、評価されないといけない→孤立と依存

・どこかで「大丈夫なんだよ」の関係づくり

「学び」を基盤にしないと機能しない→《学び》は社会に他社に対する創造力と信頼を生み出す

・人々に対話（ディベートではない）を促し、新たな価値を作り出し続けるよう駆動する

・人々が相互に承認関係を結べるちいさな<社会>の形が重要

## ●社会と「公民館」のはざま：ちいさな<社会>をたくさんつくる

○東京大学少額学習論研究室のちいさいな<社会>づくりの試み

- ・世代と世代のはざまを埋める：地域と学校のはざまを埋める  
千葉県柏市 多世代交流型コミュニティの実践  
自分たちは元気で、金と時間はあるが、寂しい。  
自分たちだけではなく、保護者世代が多忙なので、孫世代も寂しい  
→高齢者×孫  
「たまごプロジェクト」  
たまご=他+孫（よその子を孫にしよう）  
→多+孫（地域の子ども全体が自分の孫を2年間で約60回開催）  
→実行委員会  
子どもとの交流が活発化  
→学校行事を請け負う（授業、給食、掃除）遠足にもついて行く  
高齢者と子どもとの関係=自分たちでわくわくを作り出す=多世代さん
- ・人と人のはざまを埋める：自助と公助のはざまを埋める  
空き家をネットワークする  
「岡さんのいえTOMO」世田谷区  
空き家を地域に役立てる=お母さんの気晴らしの場所  
定期的な居場所をつくる/開いているデーカフェ&駄菓子屋  
中高生の居場所づくり 食事など
- ・都市と農山村のはざまを埋める：暮らしと仕事のはざまを埋める  
愛知県豊田市山間部  
ニート・若者は地元がやろうよ！というのを待っている→全国公募  
地域を担う人材創造拠点「つくラッセル」  
仕事を分け合う・負担を分け合う  
生活を支えあう・収入を分け合う  
地域全体をグループホームに  
⇒豊田市の総合計画「つながる・つくる・暮らし楽しむまち とよた」
- ・はざまを「間（あいだ）」に：相互承認と対話的学び  
＜学び＞によって信頼と想像、自立と自治 当事者性=ともに生きる  
人と人の「間」に信頼が生まれる→ニーズは「間」から生まれる関係性のもの  
「間」がしっかりすると』社会の価値創造力が上がる→社会的生産性の発展  
しかし今、「間」=信頼を作る力の基礎となる自己肯定間が低い  
非認知能力が健康も左右する  
日常生活を維持しようとする気力と自己肯定感  
日常生活のリズムを刻むことと学力・健康  
新しい「まなび」は子どもの人生そのものにかかわる  
「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、「学校経営」が子どもの「非認知能力」「学習方略」を向上させ、子供の学力向上につながる  
相互承認関係  
→自己肯定感→頑張ろうとする気力・やる気→ゲームを少し我慢して、勉強しよう→学力があがる→自己肯定感が高まる→やる気が出る  
⇒社会に対する信頼が生まれる  
若者の移動の動向…公民館など地域の活動に熱心に取り組む層には、共通して  
15歳までの地域活動の分厚い体験がある  
公民館を社会の中に埋め込む  
一般行政を社会教育的に使いこなす  
⇒サービスの提供ではなく、住民にやれることはどんどんやる。それを支える。  
地域づくりの基盤としての公民館へ！

## 6、所感

3日間という中身の大変濃いセミナーで、公民館というものに対する固定概念をとっばらう

ようなセミナーだった。現代の社会に社会教育は重要なものだが、昔ながらの公民館に縋りつくのではなく、公民館、社会教育の役割を果たすことができれば形が変わってもよいということを理解した。

今、浜田市においては公民館が変わろうとしている。これも時代の変化なのかもしれない。しかし、これからどんどん変化する時代だからこそ、形が変わったとしても公民館の役割、人があつまり、生きる力をつけていく教育を大切にしなければならないと強く思った。浜田市はまちづくりにおいて今の浜田市に何が必要で何を目指していくのか、行政ももっと勉強し、進んで言うていくことを強く望む。

